

経営日本語教育における「実践知」獲得とモデルベース GMAIS 概念応用における「実践知」獲得システム

A study of Global Model Architecture Information System

沢 恒雄

Sawa Tsuneo

遊工学研究所

Yuukougaku Institute

We developed the course of management Japanese language education, and the model base which is useful for an organizational activity. The teacher of business administration cooperates in the business with a Japanese teacher in course development and practice. The purpose is to language-ize the tacit knowledge which each holds and to share it.

1. はじめに

専門日本語教育は、専門領域と日本語教育の2人の教員の協働で、コース開発、実践と評価がされる場合が多い。グローバリゼーションの弊害が顕在化してはいるが、企業の海外進出も活発である。専門教育と日本語教育の教育実践は、事業継承の観点からも必須である。専門領域として経営を選択して、経営日本語教育のコース開発、実践と評価をモデルとして組織の知的資源・資産として位置付けをして管理する仕組みと、その過程で得られる経験知、「実践知」を言語化して獲得する仕組みを提案する。経営上の組織学習では、Polanyi (1966) による「形式知」と「暗黙知」の区別があるが、概念のみで具体的な言語化や変換の方法は少ない。今回は、メンタルモデルを共有して議論する GMAIS (Global Model Architecture Information System) と質的研究の方法を統合化して「実践知」を獲得するシステムを提案する。

2. 先行研究

①. GMAIS (Global Model Architecture Information System) : 沢恒雄 (1998,2010) では、思考支援・合意形成支援・集団意思決定支援などの環境を提供する情報バンク (シリオ,モデル,ケース,ルール,データ etc) とマルチスクリーンで多様な表現形式と思考時には、メンタルスペースにメンタルモデルを置き、対話集団の思考過程を同時に可視化して機能を果たす。

②. 実践知 : 金井廣尋宏・楠見孝(2012)では、各種

の経験知、即ち、テキスト化不可能な暗黙知を言語化するためには、「行為の過程」、「実践後」および「行為の過程における省察に関する省察」の3種類の言語化で、経験知の言語化が明確化されるとしている。

③. クリテイカルシンキング : 第1表、第2表

3. 「実践知」獲得システム

経営日本語教育コース開発を行った。経営学入門として①経営学、②経営学と戦略論入門として事例を核とした戦略論の概要からなる。さらに、組織学習としての経営日本語教育の実践時や経営の現場における「実践知」を言語化するサブシステムである PIACS (Practical Information Acquisition and Control) の概念を確立した。

「実践知」は、組織のメンバーになってから初心者→一人前→中堅者→熟達者と長期的な学習で持論を確立していくが、時間の経過だけで成長できるわけではない。組織内での絶え間ない経験・省察・対話・理論などの利活用と経験で持論を確立できる。

「実践知」は暗黙的で文字化や言語化がされていないことが多い。PIACS は、言語化して1業務や1課業を1モデルとして可視化して、それを常に精緻化していける環境を目的としている。

4. 結言と今後

経営日本語教育の実践と異分野の専門家の協業から「実践知」を獲得して規範モデルを創出することである。今後、モデルベースを有効に活用して、組織活動を質的・量的な活動ができるような仕組み創りの研究を継続していく。

連絡先: 沢恒雄, 遊工学研究所, ,yre00736@nifty.ne.jp

「参考文献」

- [1] 沢恒雄:GMAISによる環境・社会・経済トリレンマ緩解論, 情報知識学会全国大会, (2010)
- [2] 沢恒雄:グローバル・モデル・アーキテクチャGMAモデルによる情報システムGMAIS, 特開平10-198647, (1998)
- [3] 金井廣尋宏・楠見孝:実践知, 有斐閣, (2012)
- [4] 道田泰司:最強のクリティカルシンキング・マップ, 日本経済新聞社出版, (2013)

第1表 GMAISモデルベースの運用上のクリティカルシンキング総括

(注): クリティカルシンキング=クリシンと略す

NO.	大区分	系列種	定義等	クリティカルシンキング系の位置	思考区分	適用上の注意点	経営日本語教育モデルでGMAISモデルベース適用時の留意
1	クリシンの範疇	ビジネス	全体を網羅的に見渡す	領域区分	合理的	【問い】(拡散)から ↓ 多様な選択肢からより確かな収束で ↓ 【解】を得る	コース設計全般 教材開発, 実践, 評価(can-do), 編集, 省察, 再計画のPDCAサイクルを回す過程でメタレベルの省察が最重要である。 日常的な思考(枠組みの範囲で”感じること”や”見せかけ論争”)から「開かれた心」とクリシンで省察(日常とは別の枠組み)で候補案の選択・組み合わせで【疑い・拡散⇒筋を通して収束】結論を得ることができる。 省察は、他者・モノ(モデルの要素)・知識(モデル詳細要素)との対話をするこゝでなされる。
2		教育			—		
3		専門			—		
4		論理学	的確に議論を理解し, 評価・構成	中心	合理的		
5		心理学	人は自分の枠組みを通して情報処理が定常的		合理的 反省的		
6		哲学	重要なKW: 暗黙の前提 枠組み	根底	反省的		
7	クリシン周辺	心理臨床	カウンセリング・マインド アサーション	領域に応じて選択	—	—	
8		事例	ノンフィクション 失敗学		—	—	
9		ファシリテーション	集団の知的相互作用		—	—	
10		GMAIS概念	適用領域によりクリシン要素を選択・組み合わせ		鳥瞰的 虫観的	全ての過程で組み合わせて使用する	

第2表 クリシンによる経営日本語教育の実践基準と方法

	疑いつつ拡散させる	筋を通して収束	記 事
何を信じる?	批判的読解 ⇒「分かる」ための読解		クリシン・ルールを利活用
何を行う		批判的作文 ⇒問題解決 ⇒意思決定	
モデルベース利用の組織力増強	現行の組織的業務区分, 需要予測から経営・管理・実践の現実と”あるべき姿”としての経営形態・状況を熟慮 ⇒複文化・複言語の多文化共生を最終目的	組織力を増強させる⇒ 経営・管理・実践のPDCAサイクルを見通し、組織力の質的・量的な改良や改善を行う。	①問題・課題発見: 問題?課題?見かけに惑わされず(批判的態度, 省察的懐疑)思考する。 ②解・改善の探索: 見かけに惑わされず, 多面的に把握(創造的・柔軟な思考)をする。 ③解・実践評価: 見かけに惑わされず, 本質を見抜く(論理的・合理的思考), この解・改善策で良いのか? ④解決・改善: モデルベースへ反映させ新規計画時の重要な規範モデルを創製して、常に精緻かしていく。